

研究

育児困難感を持つ親と乳幼児の注意の共有

— おもちゃ遊び場面における親の行動傾向 —

則内まどか¹⁾, 青木 豊²⁾
菊池 吉晃³⁾, 里村 恵子⁴⁾

〔論文要旨〕

育児困難感を持つ親が乳幼児と注意を共有するための行動と共有時の継続時間について検討した。育児困難感を持つ親と乳幼児（育児困難群）、一般の親と乳幼児（通常群）各10組を対象におもちゃ遊び場면을観察し比較・分析を行った。その結果、育児困難群は、乳幼児の注意を遮り別のおもちゃに注意を向けさせることが多く、乳幼児の注意対象に合わせて遊びを展開することが少なかった。その際、おもちゃを操作して見せることが多かった。継続時間は、通常群において親より乳幼児が先に注意を逸らす場合で長く、育児困難群では有意差がなかった。これらの結果から、育児困難群は、乳幼児の遊び方を参照することが少なく親自身が主体になるような方法に関わるため、注意を共有しにくい状況が多くあることが推察された。

Key words: 育児困難感, 注意の共有, 親子の相互作用, おもちゃ遊び

I. はじめに

近年、虐待や子どもの問題行動の増加に伴い親子関係への関心が高まっている。親と子の関係は子どもにとって初めての人間関係であり、親との適切な相互作用を進めることは子どもの心の健全な発達に不可欠である。その相互作用を上手く進めるためには親と子の注意の共有が重要な要素のひとつであり、情緒発達との深い関わりも示唆されている^{1)~5)}。親の育児困難感と密接に関連する親と子の関係性の障害に対する治療的介入も多くなされるようになってきており^{6)~10)}、そのひとつに遊びを用いて親子の相互作用に働きかける手法も注目されている¹¹⁾。

しかし育児困難感を持つ親と子の注意の共有に関する知見は十分ではなく、さらに自然な遊び場面での観察は例が少ない。この観点での研究は親と子の相互作用過程を解明するひとつの視点となり、早期の治療的介入や予防においても有効であろう⁸⁾⁹⁾¹²⁾¹³⁾。本稿では、育児困難感を持つ親が乳幼児と注意を共有するためにとる行動の特徴を明らかにする目的で、おもちゃ遊び場面において用いられる方略とそれに伴う手段、および注意共有が成立した場合の時間パターンについて、一般の親子と比較・検討を行った。

Parent-Infant Joint Attention during Toy Play: Maternal Feelings of Difficulty with Child Rearing [1625]
Madoka NORIUCHI, Yutaka AOKI, Yoshiaki KIKUCHI, Keiko SATOMURA

受付 04. 4.19

1) 東京都立保健科学大学（作業療法士・発達認知神経科学）

採用 04. 8.17

2) 相州メンタルクリニック中町診療所（医師・精神科）

3) 東京都立保健科学大学（教授・認知神経科学） 4) 東京都立保健科学大学（教授・作業療法学）

別刷請求先：則内まどか 東京都立保健科学大学大学院（博士後期課程）保健科学専攻（フロンティア・ヘルス・サイエンス分野脳機能解析科学）

〒116-0012 東京都荒川区東尾久7-2-10

Tel/Fax: 03-3819-7270

II. 方 法

1. 対象者

何らかの育児困難を訴え、親子治療のために精神科診療所に通う初期評価中の親と乳幼児（以下、育児困難群）10組と、一般の親と乳幼児（以下、通常群）10組の合計20組を対象とした。育児困難群の親の平均年齢は 27.5 ± 3.8 (21~34) 歳で、就労者は1例、他9例は専業主婦であった。また乳幼児の平均月齢は 21.4 ± 4.3 (13~26) か月齢で、7例がきょうだい無し、3例がきょうだい有りであった。通常群の親の平均年齢は 29.6 ± 4.1 (22~38) 歳で、全て専業主婦であった。また乳幼児の平均月齢は 20.0 ± 3.1 (16~27) か月齢で、9例がきょうだい無し、1例がきょうだい有りであった。乳幼児の性別は、各群とも男女5例ずつで、自閉症などの発達障害ではなかった。親と乳幼児それぞれの年齢について、両群間に有意な差はなかった。すべての対象者において、事前に口頭と書面で十分に研究内容を説明し、研究協力の承諾を得た。本研究は、東京都立保健科学大学研究倫理審査規定に基づくものである。

2. おもちゃ遊び場面の行動観察

10分間の自由遊び場面の録画映像から、乳幼児と注意を共有するための親の行動（方略と手段）を観察し、その生起頻度と、注意共有が成

立した場合の継続時間を記録した。育児困難群では、精神科診療所で初期評価として行われた関係性の評価^{[14], [15]}のための録画映像のうち10分間の自由遊び場面を使用した。通常群では、筆者がおもちゃを持参して各家庭を訪問し10分間の自由遊び場면을撮影した。いずれも使用したおもちゃは、ままごとセット、工具セット、ドクターセット、赤ちゃん人形、腕人形、自動車、携帯電話であった。親子の相互作用を多く引き出すため対象児の月齢ではやや難しいと思われるものも含まれていた。

3. 行動カテゴリー

乳幼児と注意を共有するための親の行動カテゴリー（方略とその手段）は、矢藤^[1]の分類を参照し、さらに詳細に分析するために下位分類を加えて作成された。

1) 方 略

乳幼児の注意が向けられた対象に注目して、親の方略を大きく2つに分類した（表1）。乳幼児がすでに注意を向けているおもちゃに対して親も注意を向け、介入した場合を「応答」、乳幼児が注意を向けていないおもちゃに注意を向けさせようとした場合を「転換」とし、この2分類をさらに下位分類に分けた。「応答」では、乳幼児からの働きかけや要求に応じた場合を「維持」、乳幼児が注意を向けているおもちゃに対し、親が自発的に介入した場合を「発展」と

表1 乳幼児と注意を共有するための親の方略カテゴリーとその定義

応 答		転 換	
乳幼児がすでに注意を向けているおもちゃに対して注意を向け、介入した場合		乳幼児が注意を向けていないおもちゃに注意を向けさせようとした場合	
維 持	発 展		
乳幼児の要求や働きかけに応じて行った場合	親が自発的に行った場合		
追 加	継 続	転 向	導 入
乳幼児がすでに注意を向けているおもちゃと関連した別のおもちゃを加えた場合（人形に注意を向けている乳幼児に哺乳瓶を示すなど）	乳幼児が注意を向けているおもちゃのみを対象に介入した場合	乳幼児が注意を向けているおもちゃとは別のものに注意を向けさせようとした場合	乳幼児がどのおもちゃにも注意を向けていないとき、または全体を探索しているときに特定のおもちゃに注意を向けさせようとした場合

表2 親が方略に併せて用いる手段カテゴリーとその定義

提 示	乳幼児を参照しながら乳幼児の視野の中におもちゃを置く・見せる
例 示	おもちゃを操作してみせる おもちゃの操作を身振り手振りで示す 乳幼児の行動を規定する（乳幼児の手をとっておもちゃを操作させるなど）
手渡し	乳幼児におもちゃを手渡す
指差し	乳幼児を参照しながらおもちゃを指差しで示す

した。「発展」はさらに、関連したおもちゃを加えていく「追加」と乳幼児が注意を向けているおもちゃのみに介入する「継続」に分類した。一方「転換」では、既に乳幼児が注意を向けている対象とは別のものに注意を向けさせようとした場合を「転向」、乳幼児がどのおもちゃにも注意を向けていない時、または全体を探索しているような時に特定のおもちゃに注意を向けさせようとした場合を「導入」とした。なお、乳幼児の注意が逸れても5秒以内の行動であれば「応答」に分類した。

2) 手 段

親が方略に併せて用いる手段を次の4つに分類した（表2）。乳幼児を参照しながら乳幼児の視野の中におもちゃを置く、または見せる場合を「提示」、親がおもちゃを操作してみせる、おもちゃの操作を身振り手振りで示す、または乳幼児の手を取りおもちゃを操作させる場合を「例示」、乳幼児におもちゃを手渡す場合を「手渡し」、おもちゃを指差し示す場合を「指差し」とした。

4. 注意共有の継続時間

親と乳幼児が注意の共有を成立させた場合の継続時間（秒数）を記録した。矢藤¹⁾の分類を参照し、乳幼児が既に注意を向けている対象に親が注意を合わせて、注意共有が成立した場合を「開始者I」とし、乳幼児が注意を向けていない対象に注意を向けさせようとして（「転換」）、注意共有が成立した場合を「開始者P」とした。さらに本稿では、注意共有の成立後、乳幼児が先に注意を逸らした場合を「終了者

I」、親が先に注意を逸らした場合を「終了者P」とし、開始者別に注意の共有を成立させた1回あたりの平均継続時間を秒単位で求めた。なお、親または乳幼児が、注意共有の対象から5秒以上注意を逸らした場合、その注意共有は終了とみなした。

5. 信頼性

信頼性のチェックとして、全データのうち、方略と手段については30%、継続時間については20%のデータを対象とし、筆者と別の評定者（心理学専攻の大学院生）の計2人による分類の一致率を求めた。その結果、全行動数93.5%、方略95.7%、手段96.5%、継続時間98.9%、開始者・終了者91.2%の一致率を得た。不一致箇所に関しては、協議により解決した。

6. 比較と評価

各群において使用された方略の度数平均を対応のあるt検定により比較し、両群の方略パターンを χ^2 検定と残差分析により比較した。次に、各群の方略に伴う手段の使用パターンを χ^2 検定と残差分析により比較した。さらに、各方略における手段の使用パターンに関して χ^2 検定と残差分析により両群を比較した。また、注意共有を成立させた1回あたりの平均継続時間（秒数）を各群において開始者別、終了者別に対応のあるt検定により比較し、それに基づき両群の傾向を比較した。

Ⅲ. 結 果

1. 通常群と比較した、育児困難群の行動傾向

1) 方 略

乳幼児と注意を共有するための親からの働きかけに関して、観測された行動の合計数に両群の差は見られなかった（通常群43, 育児困難群41）。続いて方略の分類に従い「応答」と「転換」の度数平均を対応のあるt検定により比較すると、両群とも乳幼児の注意に合わせる「応答」を有意に多く用いていた（通常群 $t=22.42$, $p<0.01$, 育児困難群 $t=4.44$, $p<0.01$ ）。さらに χ^2 検定により比較すると、両群間の使用パターンの偏りは有意であった（ $\chi^2_{(1)}=43.3$, $p<0.01$ ）。残差分析によると、育児困難群は「転

換」を多く用いていることが明らかになった($p < 0.01$)。

また、「応答」をさらに「維持」と「発展」に分けて比較した。 t 検定によると、両群とも親が自発的に介入する「発展」を多く用いていた(通常群 $t=17.22$, $p < 0.01$, 育児困難群 $t=4.44$, $p < 0.01$)。 χ^2 検定の結果、使用パターンの偏りは有意であり($\chi^2_{(1)}=5.84$, $p < 0.05$), 残差分析によると、育児困難群は「発展」が少ないということが明らかになった($p < 0.01$)。

さらに「発展」を「継続」と「追加」に分けて比較した。 t 検定によると、育児困難群でのみ差が見られ、乳幼児の注意対象に関連したおもちゃを加えていく「追加」を用いることが少なかった($t=4.16$, $p < 0.01$)。 χ^2 検定の結果でも、使用パターンの偏りは有意であり($\chi^2_{(1)}=14.54$, $p < 0.01$), 残差分析によると、育児困難群は「追加」が少ないということが明らかになった($p < 0.01$)。

一方、「転換」を「転向」と「導入」に分けて比較した。 t 検定によると、育児困難群でのみ差が見られ、乳幼児の注意を遮り、別のもの

に注意を向けさせる「転向」を多く用いていた($t=3.26$, $p < 0.01$)。 χ^2 検定の結果でも、使用パターンの偏りは有意であり($\chi^2_{(1)}=13.64$, $p < 0.01$), 残差分析によると、育児困難群は「転向」を多く用いていることが明らかになった($p < 0.01$)。

全体として5つの方略の使用パターンを χ^2 検定により比較すると、その偏りは有意であった(図1, $\chi^2_{(4)}=74.19$, $p < 0.01$)。残差分析によると、育児困難群は乳幼児の注意とは別のおもちゃに注意を向けさせる「転向」が有意に多く、関連したおもちゃを加えていく「追加」が有意に少ないということが明らかになった($p < 0.01$)。

2) 手段

各群内の「応答」と「転換」に伴う手段の使用パターンを χ^2 検定により比較すると、両群ともその偏りは有意であった(通常群 $\chi^2_{(3)}=10.59$, $p < 0.05$, 育児困難群 $\chi^2_{(3)}=17.76$, $p < 0.01$)。残差分析によると、「転換」では両群とも「提示」が多く($p < 0.01$)、「応答」では育児困難群でのみ「指差し」が多かった($p < 0.01$)。

次に「応答」と「転換」それぞれに関して、使用された手段の傾向について比較した(図2)。「応答」に伴う手段の使用パターンを χ^2 検定により比較すると、その偏りは有意であった($\chi^2_{(3)}=32.45$, $p < 0.01$)。残差分析によると、育児困難群は、親がおもちゃを操作してみせる、「例示」が多く、乳幼児の視野の中におもちゃを置く、または見せる「提示」が少なかった($p < 0.01$)。

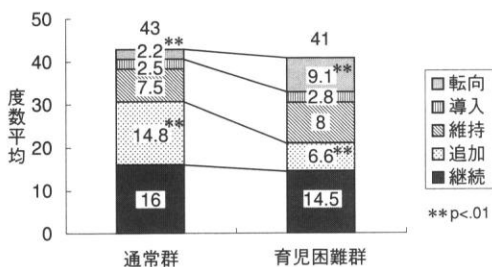


図1 5つの方略の度数平均

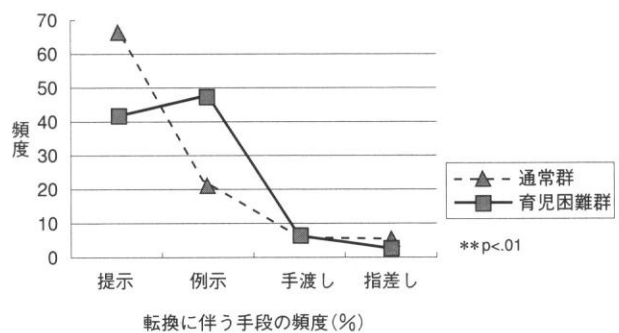
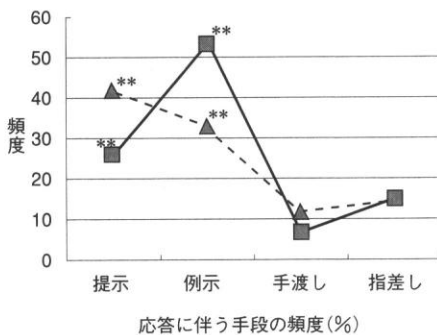


図2 方略に伴う4つの手段の頻度 (%)

0.01)。また、「転換」に伴う手段を観測しても同様の傾向が見られた。

2. 通常群と比較した、育児困難群の注意共有の継続時間

10分間で親と乳幼児が注意を共有している時間(秒数)の総和に両群の差は見られなかった。続いて、前述の分類に従い開始者の違いによる注意共有1回あたりの平均継続時間を比較した。 t 検定の結果、通常群のみで差がみられ、乳幼児が既に注意を向けている対象に親が注意を合わせて成立した注意共有(「開始者I」)の継続時間は親が開始した場合(「開始者P」)より長いことが明らかになった($t=2.42$, $p<0.05$)。さらに注意共有の成立後、先に注意を逸らす者により、その継続時間に違いがあるかを比較した(図3)。「開始者I」における t 検定の結果、通常群のみで差がみられ、乳幼児が先に注意を逸らした場合(「終了者I」)は親が先に逸らした場合(「終了者P」)より長いことが明らかになった($t=2.94$, $p<0.05$)。同様に「開始者P」において比較したところ、通常群で「終了者I」の場合は「終了者P」よりも継続時間が長いという傾向が見られた($t=2.2$, $p<0.1$)。育児困難群においては、いずれの場合も有意な差は見られなかった。

IV. 考 察

通常群と比較して育児困難群が用いた方略は、乳幼児の注意を親のほうに向けさせる「転換」が多く、なかでも新たな対象に注意向けさせる「転向」が多かった。一方、「応答」のなかでは、親が自発的に介入する「発展」が少なく、特に関連したおもちゃを加える「追加」が少なかった。つまり、育児困難群は乳幼児と

注意を共有するために積極的な行動をとる場合には、乳幼児の注意を遮り他の対象に注意を向けさせようとする事が多く、乳幼児の注意に合わせる場合には、遊びを展開していくような関わりが少ないという特徴のあることが判明した。

「応答」または「転換」の方略に伴う手段に関して、各群内では類似した傾向も見られた。しかし通常群と比較した場合、育児困難群はどちらの方略においても、乳幼児の視野におもちゃを置く、または見せる「提示」が少なく、親がおもちゃを操作する、または乳幼児の手をとり操作させる「例示」が多かった。つまり、育児困難群は親のほうに注意向けさせようとする場合(転換)には、乳幼児の注意を遮るために過剰なアピールとなり、乳幼児の注意対象に合わせる場合(応答)には、乳幼児の遊び方に対する配慮が少なく、親のペースに引き込む特徴があると考えられる。

注意共有成立後の1回あたりの平均継続時間を開始者別・終了者別に比較すると、通常群は開始者が親(転換)で成立した注意共有の継続時間に比べ、開始者が乳幼児の場合は継続時間が長かった。通常群では、さらに開始者がどちらの場合も終了者が乳幼児である場合で有意に継続時間が長かった。一方、育児困難群では開始者、または終了者による有意な差は見られなかった。つまり、通常群は注意共有が成立した場合、乳幼児の注意を主体とし、それを保持する環境を整えることで、乳幼児で始まり乳幼児で終わる注意の共有が長く続くと思われる。一方、育児困難群の継続時間の特徴は、乳幼児の遊びを展開したり遊び方に対する配慮が少なく、注意の対象を変えさせたり過剰なアピールが多いという、方略・手段の特徴に見られる親主体の関わり方の表われであるとも考えられる。この特徴はまた、たとえ開始者が乳幼児で注意が成立しても、それに続く関わり方が乳幼児の注意の継続を妨げていると考えられる。

矢藤¹⁾は、一般の親子を対象に自由遊び場面における母親の注意共有方略と手段を明らかにし、注意の共有の重要性を認知的側面に限らず、情緒的側面においても主張している。その中で、子どもと注意を共有する目的に「転換」は有効

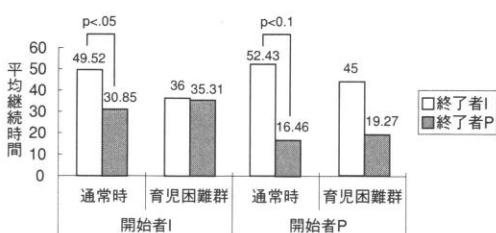


図3 注意共有1回あたりの平均継続時間(秒)

な方略ではないとし、その行動の傾向は、本稿でも類似した結果が得られた。

さらに、情緒発達への影響が示唆される注意の共有に関する研究として、Claussen ら²⁾は愛着の型と注意共有の発達について述べており、Goldsmith ら³⁾は不快症状のある母親は、子どもの注意に焦点を当てるのが少ないとしている。また母子相互作用に関して Stein ら⁴⁾は産後のうつ病は相互作用の質を減少させることを明らかにし、母親は子どもとの疎通が少なく、子どもは感情の共有が少ないことを示している。興石⁵⁾は育児不安の高い母親を対象に、遊びへの参加は積極的だが、子どもへの配慮や励ましが少ないという共通した行動パターンを指摘している。

いずれの研究も親と子の関わり方のずれを示すことで、子どもの健全な発達のために親子の相互作用の重要性を自然場面の観察または臨床的観点から指摘しており、本稿で認められた、育児困難群の特徴とも深く関与すると思われる。

注意の共有は、親が子どもの状態を敏感にとらえ、自分の行動を子どもに合う形に調節することで成立し、そこで情動を含めた相互作用過程が滑らかに進行する。これが親子関係の安定性をもたらし、親としての発達や子どもの発達につながる。

本稿において育児困難群と通常群の行動を各群内で観察すると、その傾向の大枠は類似していた。しかし行動の内容を詳細に比較することで、育児困難群の通常群とは異なる行動パターンを明らかにすることができた。

すなわち育児困難感を持つ親は、乳幼児と注意を共有しようとする際に、乳幼児の遊び方を参照することが少なく、親自身が主体になるような方略・手段で介入することが多いと言える。そのため親と乳幼児が心地よいと感じる刺激の量、質、タイミングを調整することが難しくなり、互いの注意を共有しにくい状況が発生すると思われる。これが円滑な相互作用を妨げていると考えられ、このような双方が心地よさを感じにくい状況は、遊び以外の日常場面で見られる可能性も高いと思われる。これらが親子の関係性とも影響し合い、育児困難感と密接に関

係していると考えられる。

いずれにしても今回の注意の共有に関する結果は、親子関係の成立過程を検討する1つの重要な視点であり、早期の治療的介入方法の開発や予防的観点においても極めて有効な知見であることが示唆される。

謝 辞

本研究に快くご協力頂きましたお母様方に心からの感謝とお子様の健やかな成長をお祈り申し上げます。

文 献

- 1) 矢藤優子. 子どもと注意を共有するための母親の注意喚起行動. おもちゃ遊び場面の分析から. 発達心理学研究 2000; 11: 153-162.
- 2) Claussen, AH, Mundy, PC, Mallik, SA, et al. Joint attention and disorganized attachment status in infants at risk. Development and Psychopathology 2002; 14: 279-291.
- 3) Goldsmith, DF, Rogoff, B. Mothers' and toddlers' coordinated joint focus of attention. variations with maternal dysphoric symptoms. Development Psychology 1997; 33: 113-119.
- 4) Stein, A, Gath, DH, Bucher, J, et al. The relationship between post-natal depression and mother-child interaction. British Journal of Psychiatry 1991; 158: 46-52.
- 5) 興石 薫. 母子相互交渉の質と母親の育児不安および子どもの言語発達との関連性について. 小児保健研究 2002; 61: 584-592.
- 6) Zeanah, CH, (ed). Handbook of Infant Mental Health. New York: Guilford Press, 2000.
- 7) 渡辺久子. 母子臨床と世代間伝達. 東京: 金剛出版, 2001.
- 8) 青木 豊. 乳幼児—親臨床—“関係性に基礎づけられた” 多次元的評価・介入の試み—, 精神療法 2003; 29: 518-526.
- 9) 新津直樹. 心の発達の対応の仕方—母子関係・父子関係への配慮—. 小児保健研究 1999; 58: 142-145.
- 10) 上別府圭子, 小野和哉, 呉 太善. 子供を愛せないと訴えた母親による事例—心理療法とサポート・システムによる援助—. 児童青年精神医学とその近接領域 2002; 43: 64-77.

- 11) MacDonagh, SC. Interaction guidance : An approach for difficult-to-engage families. Zeanah, CH, eds. Handbook of Infant Mental Health. New York : Guilford Press, 2000 : 485-494.
- 12) Mayer, ML, White, BP, Ward, JD, et al. Therapists' perceptions about making a difference in parent-child relationships in early intervention occupational therapy services. The American Journal of Occupational Therapy 2002 ; 56 : 411-421.
- 13) Humphry, R. Early intervention and the influence of the occupational therapist on the parent-child relationship. The American Journal of Occupational Therapy 1989 ; 43 : 783-742.
- 14) Crowell, JA, Feldman, SS, Ginsburg, N. Assessment of mother-child interaction in preschoolers with behavior problems. Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry 1988 ; 27 : 303-311.
- 15) 井上美鈴, 青木 豊, 松本英夫, 他. 乳幼児 — 養育者の関係性の総合的評価法について. 児童青年精神医学とその近接領域 2003 ; 44 : 293-404.